

国内最古級 絹織り機か

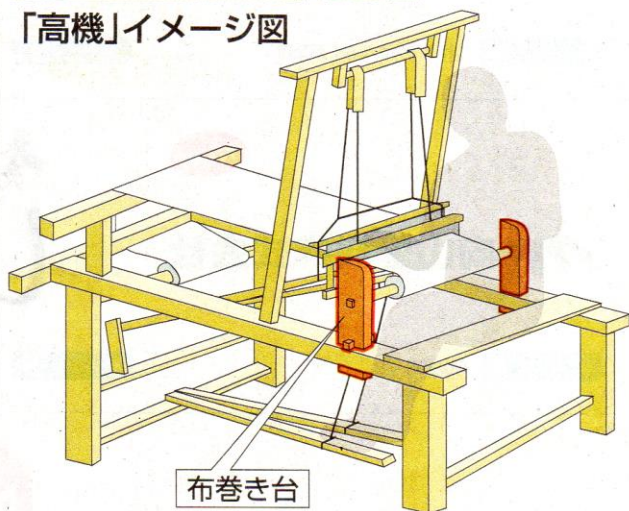
甲府・塩部遺跡から6世紀後半木製品

県考古学協会会長 「養蚕の起源に迫る」



高機の布巻き台とみられる木製品

「高機」イメージ図



甲府市の塩部遺跡で出土した6世紀後半(古墳時代)の木製品の一部が、日本最古級の「高機(4脚の絹織り機)」の部材である可能性が高いことが10日、分かった。県考古学協会の末木健会長が確認した。高機は6世紀後半に日本に広まったとされるが、これまで古代・中世の部材は確認されておらず、末木会長は「山梨は古代から養蚕が盛んな地域であり、その起源に迫る発見」と評価している。市教委は木製品の文化財指定を目指しており、過去の出土資料の検証や今後の研究の指標となることが期待される。〈植松利仁〉

高機の部材と考えられる木製品は、中央に大小の穴があるヒノキ製の部材2点(いずれも長さ約30センチ)。織り上がった布を巻き取る棒を台に留める「布巻き台」の一部とみられる。小さな穴をくさび

で本体に固定し、大きな穴に棒をはめることで回転させ、織った布を巻き取るという。一つは半分欠損し、摩耗して交換された廃材と考えられる。

末木会長が高機の部材と判断した理由は、一緒に見つかった弧状の棒(長さ73・5センチ)。弓だと考えられていたが、末木さんは片方が細く削られていることから、機織りの一種「地機(2脚の麻織り機)」の部材と指摘。先端にひもをつなげ、作業者が足で

機織りを動かす装置とみられるという。

このほか麻の繊維をよって収納する容器の側面と底板(直径約30センチ)、椅子、絹糸や麻の繊維をたたいて柔らかくする木づち、皿状の木製品も出土した。

高機は6世紀後半に日本に広まったとされ、今回の出土品も6世紀後半のもので国内最古級。関係者によると、国内ではこれまでに同時期の似た木製品が少なくとも2点確認されているが、たるなどの栓だと考えられてきた。

末木会長は「一緒に出土した道具類から、栓と考えられてきた木製品が絹織り機の部材だと分かった。布巻き台は地機にはない高機独自の装置。江戸時代の挿絵などの特徴とも合致する」と話す。

塩部遺跡は駿台甲府中の校舎建設に伴い、市教委から委託を受けた昭和測量(本社・同市中央3丁目、小林日登土社長)が2016、17年に発掘調査。木製品は河川遺構から見つかった。

河川の上流には、6世紀に造営された県内2番目の大きさを誇る加牟那塚古墳(同市千塚3丁目)がある。周辺では過去に国内最古級の馬の歯も見つかっていて、「豪族を中心に織物や馬飼育など高度な生産技術者集団が地域一帯に展開していたことがうかがえる」(末木会長)という。

末木会長は「古代・中世の高機の部材と正式に断定されたものはなかったのが重要な発見。過去の出土遺物の検証材料、高機の歴史を探る指標となる」と話している。